



地域医会だより

平塚市医師会皮膚科部会

第32回例会 テーマ「先天性皮膚疾患の診断と治療」

出席者：21名

日時：2004年1月21日（水）18：45より

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：西沢春彦（平塚共済病院皮膚科）

I タリオン錠商品説明（18：45～19：00）

田辺製薬株式会社

II 講演（19：00～20：10）

講師：馬場直子先生（神奈川県立こども医療センター皮膚科部長）

テーマ：「先天性皮膚疾患の診断と治療」

【内容の要約】：新生児期に現れてくる皮膚の異常は、全身疾患の一症状として最初に気づかれる徴候としての意義がある。当面は経過観察してよい疾患なのか、早期治療が必要なのか、皮膚以外の合併症を伴う可能性があるのか、予後は、などを含めた確かな診断が要求される。また、いわゆる「あざ」そのものが、外観上目立つ部位に有る場合は、本人や家族の精神的苦痛となり、性格形成の上でも大きな影響を及ぼすこともあり、決して軽視できない問題と思われる。レーザー治療や形成外科的手術の進歩に伴い、できるだけ早い時期の治療が功を奏する例も多くなってきており、治療方針が以前と異なる疾患もあるので、初診の機会が多い産科、小児科、皮膚科医は、現時点で最良とされる治療方針について知り、適切な時期に適切な治療が受けられるようにすることが求められていると思う。当院でしばしば経験する先天性皮膚疾患の診断と、現時点でできる治療について概説した。

III 症例供覧（20：10～20：30）

木花いづみ（平塚市民病院皮膚科）：色素失調症の1例

西沢春彦（平塚共済病院皮膚科）：レックリングハウゼン病の1例

IV 懇親会（20：30～）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、田辺製薬株式会社

（文責 西沢春彦）

第33回例会 テーマ「シミと美白」

出席者：23名

日時：2004年5月20日（木）18：45より

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：木花いづみ（平塚市民病院皮膚科）

I 挨拶（18：45～19：00）

塩野義製薬株式会社

II 総会（19：00～19：10）

III 講演（19：10～20：10）

講師：溝口昌子先生（聖マリアンナ大学皮膚科教授）

テーマ：「シミと美白」

座長：大倉光裕先生（おおくら皮膚科）

【内容の要約】：所謂「シミ」には種々のものがある。頻度の多い「シミ」として①老人性色素斑（日光黒子）、②肝斑、③後天性両側性真皮メラノサイトーシス（ASDM）を取り上げる。①と③はルビーレーザーあるいはQスイッチルビーレーザーが奏効する。肝斑は60歳前後で自然治癒する。しかし、治療を希望する中年女性が多い。肝斑をレーザーで治療することは禁忌に近く、増悪する危険もある。現在、美白剤といわれる脱色効果のある医薬部外品が肝斑の治療に使われている。美白剤の定義は「紫外線によるシミ、そばかすの予防」であるが、一般の消費者の期待は既存の色素斑の白色化を期待しているし、我々皮膚科医も同様である。最近では美白剤も進歩し、効果の強いものもあり、作用機序も様々である。メラニン産生に必須の酵素であるチロジナーゼに拮抗するもの、チロジナーゼの分析を促進するもの、紫外線照射によりケラチノサイトから産生放出されメラノサイトに作用してメラニン産生を促進するサイトカイン（エンドセリン）のレセプターに拮抗作用のあるもの、表皮のturn overを促進してメラニンの排出を促すものなどがある。美白剤は褐色調濃い重症肝斑の方により効果はあるが完治はしない。紫外線からの制御も必要である。

IV 症例供覧（20：10～20：40）

栗原誠一（湘南皮膚科）：ハイドロキノン含有漂白クリームによる白斑の1例

木花いづみ（平塚市民病院皮膚科）：原因除去により軽快した接触皮膚炎の1例

島田卓治（平塚市民病院形成外科）：平塚市民病院形成外科における「シミ」の治療

V 懇親会（20：40～）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、塩野義製薬株式会社

（文責 西沢春彦）



地域医会だより

三浦半島皮膚科懇話会 横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会

三浦半島皮膚科懇話会 第32回例会 横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会 第15回例会

日 時：2004年2月7日（土）18：00

場 所：横須賀プリンスホテル

製品紹介 アレルギー性疾患治療剤「アレジオン」（三共株式会社）

特別講演 重症薬疹とその対応

講 師 池澤善郎先生（横浜市立大学大学院環境免疫病態皮膚科学教授）



薬疹は、誘発疹が最初の原発疹に比べて発疹の誘発に必要な投薬期間の短縮化と投薬量の低下という免疫学的既往、薬剤間の交差反応、原因薬剤によるin vivo皮膚試験やin vitro試験の陽性反応などから、多くの場合薬剤アレルギーによって誘導されていると考えられる。最近、T細胞の活性化機序において自然免疫や調節T細胞が果たす重要な役割が明らかとなり、重症薬疹においてもエフェクターT細胞、これを賦活化する樹状細胞、免疫グロブリン抗体産生に関する研究が進み、またdrug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS；薬剤性過敏症候群)にhuman herpes virus-6 (HHV-6)の再活性化（再燃）が高頻度に見られることから薬剤アレルギーとウイルス感染の関係が注目される中で、重症薬疹の病態に対する考え方にも大きな変化の時を迎えている。こうした薬疹の病態に対する考え方の変化は、またこれまで経験的に行われてきた重症薬疹の治療にも新しい視点をもたらしている。そこで、本講演では、まず薬疹とそのメカニズム、原因薬剤からみた薬疹について解説し、その後で重症薬疹とその診断機序、その病態とその治療について解説する。

三浦半島皮膚科懇話会 第33回例会 横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会 第16回例会

日 時：平成16年10月30日（土）17：30

場 所：横須賀プリンスホテル

製品紹介 アレルギー性疾患治療剤「アレジオン錠」（日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社）

特別講演 小児のアトピー性皮膚炎の治療

講 師 向井秀樹先生（横浜労災病院皮膚科部長）



アトピー性皮膚炎の治療の原則は、①かゆみのコントロール、②皮膚症状の改善、③原因の究明と生活指導である。小児例では、かゆみや掻き癖を抑えコントロールすることが治療の第一歩となる。最近の研究によると、抗アレルギー薬の中には好酸球やサブスタンスPの抑制作用が知られている。皮膚症状の重症度や部位な

どにより、ステロイド外用薬を上手に使って治療効果を上げている。最近、小児用の免疫抑制薬が発売され、治療の幅が広がった。マスコミや健康雑誌などでステロイド外用薬の副作用が過度に報道されて以来、使用を中止し重症化する例が少なくない。アトピービジネスや民間療法による被害も跡を絶たない。われわれ皮膚科医が適切な指導を心掛け、誤った治療法を是正していく必要がある。重症の乳児の中には食事アレルギーが関与する例がある。難治例に対しては安易に治療内容を強化する前に、アレルギー検査や食事制限や誘発試験を行う必要がある。また、イソジン消毒療法を推進、反対する意見がある。極端な使用法をせず、湿潤する局面に、一時的におこなう補助療法にすぎない。

情報が錯綜し、従来の治療法に不安を抱き悩む両親や家族が増えている。慢性かつ重症化する患児には積極的に入院療法を行っている。短期間に確実に皮膚症状は改善し、QOLの向上と適切な外用方法、かゆみ対策、そして原因の究明や生活指導などが期待出来る。

